

はじめに

同志社女子大学 大倉 真人

1. 「リスク認知と金融リテラシー」の重要性

「保険＝万が一のための保障」という考え方は、保険に対する一つのかつ一般的と思われる考え方であると言える。ただしこの考え方が字句どおりに成立するためには、各個人が（１）「万が一」について認知していること、（２）「保障」について認知していること、という２つの要件の両立が求められる。

しかしながら現実社会を鑑みた場合、上記（１）および（２）が両立しているとは言い難く、むしろ逆に（１）および（２）がともに欠落していると考える方が自然かもしれない。

（１）について言えば、「万が一について認知する」ことは、目に見えない抽象概念である「リスク」の認知に結びついており、さらにはリスクを数値で表現したものとしての発生確率の認知に帰着する。しかしながら、人々が日常生活において直面するリスクを十分かつ正確に認知しているとは言い難いのが現状である。そして不十分なリスク認知は、保険をはじめとするリスクマネジメント手段の利用における制約となる。

（２）について言えば、まずそのリスクに対応した保険の存在を認知する必要がある、その上でどのような場合に保険金が支払われるのか・どの程度の保障が受けられるのかなどといった中身について認知する必要がある。しかしながら現実社会においては、金融リテラシーの不十分性を理由に、このような認知が不十分な中で保険契約の締結に至っている場合が少なくなく、それゆえに各個人のリスクに対応しない保障が提供されてしまっている可能性がある。

ところで、本報告者（本シンポジウム司会者）は、経済モデルを用いた分析を主たる研究アプローチとしている。そして、例外はあるものの多くの場合、経済モデルにおいて登場する個人は、（１）自身が直面しているリスクの存在およびその発生確率を正確に認知していること、（２）リスクに対応した保険の存在およびその保障内容を正確に認知していること、の２つを「暗黙の」前提としている。さらに言えば、これらの点は、モデルにおける仮定を述べる際に言及されることさえ少なく、換言すればモデルにおいて登場する個人は「リスク認知」および「金融リテラシー」に関する問題を有しない個人であると言える。しかしながら、モデルにおいて「暗黙の前提」としている状況が現実社会において成立しているとは限らず、もし成立していないのであれば、経済モデルから得られる結論は、現実社会に対する解としては不十分なものとなり、ひいては経済モデル分析を行うことの有用性低下に繋がるものと考えられる。

以上の観点に立脚した場合、日本保険学会大会において「リスク認知と金融リテラシー」というタイトルでのシンポジウムを開催することは、「保険＝万が一のための保障」という観点から見た場合にも、保険経済学という学術領域の観点から見た場合にも極めて大きな意義を有すると考えられる。

2. シンポジウムの構成およびねらい

本シンポジウムは「講演」と「パネリストによる報告」という2つのパートによって構成されている。また、多様な角度からリスク認知と金融リテラシーについて議論することを目的に、パネリストを「産（生命保険業界、損害保険業界）」「官（金融広報中央委員会、日本銀行）」「学（大学）」から招いている。なお、講演およびパネリストによる報告のタイトルについては以下のとおりである。

- 講演：家森信善 氏（神戸大学）「保険教育、保険リテラシーと保険購入行動—リスクに備える手段としての保険への理解を深めるために—」
- 第1報告：畔上秀人 氏（東洋学園大学）「生活者のリスク認知とリテラシー—近代保険会社誕生から140年を迎えて—」
- 第2報告：中川忍 氏（埼玉大学（前：金融広報中央委員会、日本銀行情報サービス局））「人生100年時代における金融リテラシーと保険の役割」
- 第3報告：斉藤数弘 氏（生命保険文化センター）「中学生・高校生に対する「生命保険」に関する金融リテラシー向上に向けた取り組み」
- 第4報告：山本真史 氏（日本損害保険協会）「金融・損害保険リテラシーの向上に係る取り組み」

そして本シンポジウムでは、講演・報告の後に、パネルディスカッションおよびフロア（参加者）との質疑応答の時間を設けている。これらの時間においては、講演および報告の内容についてのより深化した議論を行うとともに、フロア（参加者）から出た質問をもとにしたディスカッションを展開することを予定している。その上で、日本保険学会においてリスク認知および金融リテラシーについての学びを深めるとともに、本シンポジウムのテーマに関連した情報提供の機会とすることをねらいとして掲げることにはしたいと考えている。